

文明と経営

——その研究の方向——

村田 晴夫（桃山学院大学）

はじめに

20世紀は、文明の一つの頂点を実現させた世紀として記憶されるであろう。その文明の様式を具体的に決定する役割を果たしたのが企業 **Business Enterprise** という怪物であった。その怪物を操る技としての経営ということがこの文明におけるもっとも重要な役割となった。企業の経営に限らず、行政府から宗教団体にいたる、そして趣味人と有閑階級を含むあらゆる組織体においてもまた、その管理（経営）が重要な社会的機能となってきた。

こうして経営学がその学的対象を得て、方法論的に試行を重ねつつ、登場してくるようになった。それは純理論的認識の学よりも実践の学であることが求められた。アメリカ経営学とドイツ経営学が代表的であるが、前者においては実践の学として、具体的には「科学的管理法」として始まったのであり、後者においては学としての適格性を問われるという、いわゆる方法論争が、第一次世界大戦の前から始まって第二次大戦後の半世紀にも及んだのであって、ついには、折からの論理実証主義からポパーの批判合理主義に至り、さらにクーンとその後にまで及ぶ科学論の展開の歴史とも重なってくるのであったが、その荒波を乗り越えなければならなかった。

経営学がその本質において含むところの学的認識と実践性の複合は、学の有りように関して、また大学教育の有りように関して、重要な示唆に富んでいると言えるであろう。

企業文明は、学のスタイルをも変えさせた。科学という客観的な認識に立って、その応用という意味での「技術」を実用化してきた近代科学技術の歴史に対して、生産過程における科学的管理のように、実践の「学」を追究する道がもてはやされるようになった。経営学が含むところの学的認識と実践性は、企業文明とどのように切り結び、学の世界を現実の文明世界の中に見据えて、文明の頹落を語ることができるのか、この問いに対して、「哲学スル」ことによって応えて行く。これが本稿の目標である。

I 認識と実践 ―― 20世紀、企業文明を巡って

1.1. 〈国家と経済〉から〈文明と経営〉へ

経済学：国家が 経済学を 政策として 利用する ⇔⇔ 客観性、科学的正当性

対象の如何なるものかを 認識、知識

経営学：企業が 国家を 手段として 利用する 経営学 ⇔⇔ 個と欲望 → 営利

企業あるいは組織体の経営管理の 実践

1.2. 20世紀文明

20世紀は、人類史上、全く新しい文明の相貌を生み出した。

企業文明、組織中心社会、管理社会、情報化社会

それらの本源にあるものは近代科学技術である。

「具体性置き違い」の文明 → 個の欲望増大の加速度、個人の文化価値理念の優先

1.3. 文明の 5段階〈真理 Truth、美 Beauty、冒険 Adventure、芸術 Art、平安 Peace〉の生成（ホワイトヘッド Whitehead, A. N., *Adventures of Ideas*, 1933）

1.4. 企業文明が内包する根本問題

20世紀、大企業の力の優先が起こる。所有と経営の分離（バーリ＝ミーンズ）。

企業活動の原点は 営利事業。企業の 社会的存在の原点は 文明の安定性の確保にある。すなわち、人々の生活の様式を確立し、それを保護し、供給すること。

21世紀世界の哲学的イメージ：「自らの生きがいを見出しうる社会」、「生きる価値を感じることでできる社会」、「生きられる世界：自由意志によって選択し行動できる社会」・・・

→ 協働システムあるいは組織体における自己の実現 → 冒険 → 芸術 → 平安の実現

II 経営学史研究の意義

2.1. 経営学の誕生、そして問い「経営学とは何か」

（ 1 ）ドイツ経営学： 1898年ライプツヒ商科大学。私経済学 → 経営経済学。

①私経済学と公経済学との相互関係について、これをどう見るか

・・・有機体的関係か原子論的關係か

②技術論的経営経済学、規範論的経営経済学、理論的経営経済学

③科学か？・・・科学とは何か？

（ 2 ）アメリカ経営学： 19世紀末から20世紀初頭、テイラーによる「科学的管理」

F. W. Taylor（1856-1915）技師

① M. P. Follett（1868-1933）ケースワーカー、哲学者、経営学者

② C.I. Barnard (1886-1961) 経営者 (ニュージャージー・ベル電話会社社長)
A.N. Whitehead (1861-1947) ハーバード大学哲学教授 (1924年)。有機体の哲学。

H.A. Simon (1916-2001) カーネギー・メロン大学教授、ノーベル経済学賞 (78年)。

経営人仮説、システム論 (機械論的)、組織の意思決定過程の研究。

2.2. 文明と組織 —— ‘小文明’ 試論 [ホワイトヘッドの文明論を書き換える]

日本経営学界のリーダー達に学ぶ文明の創造と経営の実践モデル

藻利重隆に依れば、経営学は資本主義経営における企業を対象とする学問だと言われる

三戸 公における経営学観は、企業をマルクスの資本論の射程において捉えること、その企業活動が所有と支配において如何なる変貌を成し遂げてきたのかという問題、フォレット、バーナードの組織論を基礎にして、人間中心の経営学を打ち立てること、さらには産業社会から組織中心社会への変遷する現代、そして現代において進行している情報革命とその社会的変貌を捉えることとして経営学が壮大さを露わにする。

山本安次郎の学問の目的はドイツ経営学とアメリカ経営学の統合にある。西田哲学の行為的直観の論理によって、「主体としての企業」が、「客体としての事業」を「主体的に統合する」ところの「経営存在」観を打ち出した。

〔藻利重隆・山本安次郎・三戸 公の三学説に対する解釈〕

「真理」における協働という共通目的のもとでひとつの組織体になっている。

ここに‘新しい文明の萌芽’と呼べるものを見る。進化文明論の構想へと進めたい。

2.3. 進化文明論

文明は制度か・・・ → 進化 → 新しい文明の創出

《生きる価値を創造できる》ような社会 → システム不完全性原理の段階の社会 →

→ 自覚の共有 ← 共なる国、共生社会 → 「平安」なる社会の実現への希望の共有

Ⅲ 「哲学スル」経営学

3.1. 「哲学スル」とは何か

「哲学スル Philosophieren」とは、根源的なものについて徹底的に考えるというソクラテスの精神を原型としている。そして改めて「経営とは何か」、そして「経営学とはいかなる学か」をわれわれの問いとして問うことから始めよう。

その問いは、「人間とは何か」を問い、「世界とは何か」を問うことへとわれわれを導く。

われわれは「哲学スル」精神を次のように定義して進むことにしよう。

〔経営学史研究における「哲学スル」〕

経営学史研究において「哲学スル」とは、以下の精神活動を言う。ただし 5 項目中、第 1 項目は必修で、他の 4 項目はそれぞれの目的に合わせて選択すればよい：

- ①自ら徹底的に問い、徹底的に考えること。②～⑤は必要に応じて取捨選択してよい。
- ②人間とは何かを問い、よく生きることに向けて問うこと
- ③世界の有りようの本質を問うこと、すなわち世界観の徹底的吟味
- ④思惟の自由、学問に対する学（学の学）、「思惟」に対する思惟、を推進すること
- ⑤現実化への精神の場所：哲学の精神としての思索を形あるものに育てること

〔過去から未来へ〕

哲学がその思想を形あるものにまで現実化するべく、力を振り向けることが可能ならば、そのとき歴史は過ぎ去った過去への思い出から転じて未来へと方向を変えるであろう。経営学の未来を語り得るのは、かくのごとき「哲学スル力」なのである。

3.2. 哲学の場から専門分化した場へ：スミス、マルクス、マックス・ウェーバー……

次の哲学観はわれわれの研究心を奮い立たせてくれる。

「哲学は、後に現実的な形式を取って現われることになる精神の発生すべき内部の場所である」（カール・レヴィット 1967 年、33 頁）。

経営哲学は（1）経営の意味の探究、（2）経営学方法論の吟味と探究、（3）経営理念の哲学の探究の三つの領野の総合から成る（村田晴夫 2003 年）。

IV 二十一世紀企業文明の考察

4.1. 人間と社会、そして自然の問題——その確認と定式化・思惟の思惟

20 世紀企業文明の残した課題、人間の疎外、多元文化の共生、自然観の貧困

4.2. 自然観の問題から

自然とは何か → 自然哲学、コスモロジーの創出 → 人間観と接続

「自然は理想の究極目標（ideal ends）を宿すのであり、そしてその究極目標を意識的に明確化できる人間を生み出すのである。」（AI, p. 86; 邦訳 116 頁）

そのような力、すなわち自然の究極目標を意識できる人間存在を生み出した自然の力、に対する畏敬の念が、自ずと現れるのである。そしてそこからまた人間の尊厳への自覚が芽生えるのである。人間の尊厳の自覚は人間相互の絆（bond）をもたらす（村田、2016）。

4.3. 新しい人間観と文化価値の創造

進化文明論の具体化へ → 文化の創造、新しい価値の創出

4.4. 日本経営学の論理と方法

西田哲学。自然哲学との出会いと交流が、次につながる何者かを生み出すであろう。

4.5. 企業文明の変革のために：文化価値理念の変革、その研究はいかになされるのか

欲求・衝動・欲望（ Desires, Impulses, Wants⇔Barnard）の多様性と限界はいかにして自覚されるか。またそれを導くものは何か・・・ → 「哲学スル」こと

結び——新しい「哲学スル」に向けて

人間性の回復、多元文化の共存共生、自然が内包する究極の価値を無視する愚かさからの回復、これらの諸問題がわれわれの前にある。21世紀の学が引き受けるべく与えられた20世紀企業文明からの問題である。

個人の自由と尊厳に対する深い価値の観念が浸透し、多元的文化の共存が日常のものとなるような社会。そういう社会を実現させよう、それこそ「生きられる価値の社会」である。自然とは何かと問うこと、西田幾多郎の哲学、そしてホワイトヘッドの有機体の哲学との対話を通して、自然の中の人為という文明の本質を学びたい。

ここには哲学が要請されるであろう。人間観、社会観、自然観、そして組織観。組織こそ共なる生活に直結する生きたシステムであり、家庭、学校等の教育組織、会社あるいは企業の組織、行政組織、政治組織、宗教組織、あらゆる社会組織の複合的な活動が、文明の持続と革新を支える拠点である。組織の活動を具現している倫理的文化価値理念としての組織文化に対する企業文明との哲学的接続が不可欠である。

社会科学の創造が「哲学スル」ことと深く結びついた例として挙げられるのはアダム・スミス『道徳感情論』である。マルクスにおける『資本論』を始めとする仕事はそれ自体が「経済学批判」など、哲学そのものであった。そしてマックス・ウェーバーの膨大な仕事の中から、よく知られた『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』の最終節に掲げられた警告を思い出せば、それがいかに哲学的予言であることか、明らかではないだろうか。

20世紀文明はある意味で「豊かな時代」を切り開いて見せてくれた。その豊かさの背後に、どんなに哀れな人間疎外が起こってしまったのか、われわれはこれを率直に見なければならぬ。そしてそうした矛盾を克服できるような文明社会を再生しなければならぬ。われわれは差し当たってそれを次の学問研究の理想を描く中で、共に自覚しようではないか、そして共に研究する道を探そうではないか。これがここでの私の提案である。

参考文献

- ・ Whitehead, A. N., *Adventures of Ideas*, 1933. 山本誠作他訳『観念の冒険』松籟社 1982
- ・ レヴィット『ヘーゲル・マルクス・キェルケゴール』柴田治三郎訳、未来社、1967年。
- ・ 三戸 公『人間の学としての経営学』産業能率大学出版部、 1977年。
- ・ 藻利重隆『経営学の基礎（新訂版）』森山書店、1973年。
- ・ 山本安次郎「経営学の本格化と経営学史研究の重要性—経営学史学会の創立を祝して—」経営学史学会編『経営学の位相』経営学史学会年報第1輯、文眞堂、1994年。
- ・ 村田晴夫「文明と経営、その哲学的展望に向けて—経営学における具体性とは何か—」明治大学経営学研究所経営論集第64巻第4号、2017年3月。
- ・ 村田晴夫「経営哲学の意義」経営哲学学会編『経営哲学とは何か』文眞堂、2003年。
- ・ 村田晴夫「文明と経営（1）—ホワイトヘッドの文明論における「平安 Peace」の概念について—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第23巻第2号、1997年12月。
- ・ 村田晴夫「人間として世界に立つ」谷口他編『自由と愛の精神』大学教育出版、2016年。